

# 田んぼ2030プロジェクト 田んぼだより

第11号 2026年2月16日発行

田んぼの生物・文化多様性2030(略称:田んぼ2030)ニュースレター

発行:NPO法人ラムサール・ネットワーク日本(ラムネット)水田部会  
所在地:〒110-0016東京都台東区台東1-12-11青木ビル3F  
TEL/FAX:03-3834-6566 電子メール:info@ramnet-j.org  
ホームページ: <https://tambo10.org>



## 目次

- 水田の生物多様性を崩壊させる「節水型乾田直播」に未来はあるのか 原野 好正 (ラムネット) 理事) … 1～2
- 田んぼの生物文化多様性 2030 プロジェクトの第10回ミニフォーラム報告  
「気候変動対策による負の影響を最小化し、正の影響を向上させる—自然を活用した解決策の適用」  
安藤よしの (ラムネット) 理事) …………… 2
- JA全農「親子で挑戦! 稲刈り&生きもの調査」—伊勢原市 報告 金井 裕 (ラムネット) 共同代表) …………… 3
- 水田部会からのお知らせ …………… 4

## 水田の生物多様性を崩壊させる「節水型乾田直播」に未来はあるのか 原野 好正 (ラムサール・ネットワーク日本)

農林水産省は、2026年度予算概算請求で「戦略的農林水産研究推進事業」を打ち出しましたが、その一環として節水型乾田直播の普及を掲げています。節水型乾田直播の導入によって、生産コストや労働力の削減が可能で、食料安全保障の強化に貢献できるとしています。すでに「田植え不要の米づくりコンソーシアム」を企画し、2025年9月と12月に大規模な会合を開催しています。その告知チラシには「日本各地の農山

漁村、特に中山間地域では、人口減少や高齢化が急速に進み、担い手不足が深刻な課題となっています。こうした状況乗り越える新たな手法として注目されているのが田植えが不要となる直播栽培による米づくりです。」と書かれています。

しかし、節水型乾田直播という農法は、本当に日本の米づくりの救世主となるような素晴らしいものなのでしょうか。



### ■ 拙速な普及を懸念する40団体が共同声明を



節水型乾田直播は、いくつかの大きな問題点をはらんでいます。そうした問題点に目を向けずに、農林水産省は拙速にこの農法を推進しようとしています。このことに対して、2025年10月にラムネット J と OK シードプロジェクト、日本消費者連盟が呼びかけ団体となり「共同声明：節水型乾田直播の安易な普及を控え、水田の多面的機能の維持を求める」を発表し、農林水産大臣にも提出しました。賛同団体は環境団体、消費者団体、食の安全に関わる団体など40を数えました。

この共同声明の主旨は、節水型乾田直播の安易な普及は水田の維持を放棄することであり、その結果、田んぼの持つメリットや多面的機能を捨て去ることになりかねない、というものです。(共同声明はラムネット J のウェブサイト参照 <https://ramnet-j.org/意見書-質問書/1202>)

では、水田の持つメリットとは何で、節水型乾田直播が抱える問題点とは何でしょうか。

### ■ 田んぼはコメを作る工場ではない

田んぼはコメを生産する農地であることはもちろんですが、それだけではありません。ラムサール条約「水田決議」でも示されたとおり、田んぼは生物多様性を育む重要なフィールドです。また、水源の涵養や水質浄化機能もあります。田んぼの水には地域を冷却する気候緩和の役割もあり、大雨のときには遊水池として治水・防災システムにもなります。田んぼを乾田化するということは、これらの機能を捨て去ることになるでしょう。

それだけではありません。田んぼでは連作障害がありません。これは水を引き込むことで、ミネラル分をイネに効率よく吸収させることができるからです。また、深水管理などによって雑草の抑制もできます。しかし、節水型乾田直播を導入した場合には、こうした田んぼの恩恵を受けることができなくなります。雑草をコントロールするために、播種前に大量の除草剤散布が必要となります。また、発芽率の低下も指摘されています。従来の田んぼでは

温室などで発芽させた苗がある程度育ってから、田んぼに移植（田植え）します。確かに手間はかかりますが、気温の低い時期でも発芽をコントロールすることが可能です。しかし、節水型乾田直播では直接乾田に播種するため、低温で発芽しないこともままあります。その場合は、もう一度播種をしなければいけません。

長期的には連作障害だけでなく、海外の事例では雑草イネの増加が問題となっています。雑草イネとは、収穫時にこぼれ落ちたタネ（コメ）が自生して野生化したものです。水を張った田んぼでは代掻きや湛水管理でイネの野生化を未然に防いでいますが、乾田では発芽率が上がるため、播種前のグリホサート（除草剤）の散布が必要となります。

上記以外にも、節水型乾田直播では導入時に播種機などのイニシャルコストが必要であるとか、狭い農地では実施できない

ため小規模農家は切り捨てられるなどの問題が山積しています。田んぼはコメを作るための工場ではありません。コストカットを理由に、今まで育んできた田んぼの文化を捨て去ってよいのでしょうか。節水型乾田直播を普及するための莫大な予算は、生物多様性を育む田んぼの維持にこそ使うべきではないでしょうか。

#### 節水型乾田直播問題院内集会

日時：2026年2月24日 16時～

場所：衆議院第2議員会館多目的会議室および

Zoomによるオンライン会議

参加無料・要事前申し込み

申し込みは URLまたはQRコードから

<https://forms.gle/uTnkoBTvZjnoujiD7>



## 田んぼの生物文化多様性 2030 プロジェクトの第10回ミニフォーラム

「気候変動対策による負の影響を最小化し、正の影響を向上させるー自然を活用した解決策の適用」

報告 安藤 よしの（ラムサール・ネットワーク日本）



第10回ミニフォーラムを2025年10月29日(水)18:30～、オンラインで開催しました。準備に手間取り、広報期間が短かったにもかかわらず、市民団体・研究者・農業者・学生など43名が参加、滋賀県立琵琶湖博物館 総括学芸員の大塚泰介さんによるプレゼンテーション「温暖化防止と生物多様性のトレードオフを超えて」を聞いたあと、各地の田んぼで実施されているメタンの発生を抑制し、かつ、生物多様性を損なわない農法について、活発な意見交換が行われました。



大塚 泰介さん

### ー大塚 泰介さんプレゼンテーションの概要ー

●「みどりの食料システム戦略」の目標の一つに「温室効果ガスの排出削減」があり、その具体的な方策の例として「メタン発生の少ない稲品種や水田管理技術の開発」があげられている。その手段として、中干延長が推奨され、各都道府県の行動計画に中干延長が含まれたことをとりあげる。メタンは重量が同じであれば二酸化炭素の数十倍の温室効果を持ち、水田1 haあたり発生するメタンの温室効果はガソリン車1台よりも大きいと言われているので、対策は必要である。

#### ●水田からメタンが発生する仕組み

確かに長期中干しはメタン発生を減らすことが多いと言っても良いが、間断灌漑などの代替手法もあり、過度な一般化は避けなければならない。

●悪影響を緩和する技術ー農林水産省「令和3年（2022年）度環境保全型農業効果調査委託事業結果概要」の中では、地域の営農の実態（作付け品種、農事暦）や地域の生物相を踏まえたいくつかの対応によってトレードオフを解消し、

地域における温室効果ガス削減と生物多様性保全を両立できる可能性が提案されている。このレポートは、「みどりの食料システム法」（2022年7月施行）に先立って公表されている。こういうトレードオフ解消の視点が、国の「みどり戦略」や各都道府県の「基本計画」に欠けているように思われる。

#### ●中干しの代替案

考え方①稲わら等の嫌氣的分解の抑制 稲わら無施用 稲わらを全て回収して圃場に施用しない

考え方②透水性の確保 米の収量は、日減水 20～30 mm 程度の水田で最大になる

考え方③根の酸化力強化 など

最後にまとめの提案として、SDGsなどと同様「みどりの食料システム戦略」に掲げられた目標は、どれも達成すべき重要なものであるが、その相互にしばしば矛盾が生じることがある。それぞれの視点からの観察・研究結果を持ち寄って議論し、各地の基本計画を検証して、現場の経験に基づいた「美味しく健全な米づくり」「多くの生き物を育む田んぼ」と両立する地球温暖化対策を提案していこうと呼びかけました。

### 私たちなりの見方で「みどり戦略」を再検討しませんか？

- SDGsなどと同様「みどりの食料システム戦略」に掲げられた目標は、どれも達成すべき重要なものです。
- しかしその相互にしばしば矛盾が生じること、個別目標の達成のために逆作用が大きい手段がとられようとしていることを、私たちは警戒しなければなりません。
- それぞれの視点からの観察・研究結果を持ち寄って議論し、各地の基本計画を検証して、修正を迫っていきませんか？
- そして、上から降ってきた矛盾の多いやり方ではなく、現場の経験に基づいた「美味しく健全な米づくり」「多くの生き物を育む田んぼ」と両立する地球温暖化対策を提案し、その価値を農水省に認めさせていきませんか？

まとめの提案 スライド





## JA 全農「親子で挑戦！稲刈り&生きもの調査」ー 伊勢原市

報告 金井 裕（ラムサール・ネットワーク日本）

JA全農には、田んぼ10年プロジェクトの発足の時から支援をいただいています。そして、全農としても田んぼの生きもののための活動が行われています。今回は、その活動の「田んぼの生きもの調査」を見せていただきました。全農の「田んぼの生きもの調査」は25年前に開始された、消費者に対して田んぼが日本の多くの生きものにとってどれだけ重要な場所であるか体験により理解してもらうとともに、農家さんとのつながりを得てもらう活動です。

全農「田んぼの生きもの調査」は、全国のJAがそれぞれに開催しているものも多いですが、今回取材させていただいたのはJA全農広報部が主催するJA全農プレゼンツ2025秋「親子で挑戦！稲刈り&生きもの調査」です。参加者の親子約30名が2025年10月4日、10:00に神奈川県伊勢原市の太田公民館に集まりました。全農の岡八寿博広報調査部次長の開会あいさつ後、講師の谷川徹（農と生きもの研究所代表）さんから活動のポイントや注意点の説明を受け、生産者の内藤 正行さんの田んぼに向かいました。

まずは、鎌を使つての稲刈りに挑戦です。刈り取るときの稲や鎌の持ち方の説明のあと、参加者はたわわに実った稲に向かいます。20分ほどの刈り取りで、畔に稲が山になり、この山を前にして、記念写真を撮りました。

稲刈りの後は、生きもの調査です。谷川さんから生きものを探すポイントの説明があり、参加者は田んぼの中や、畔、近くの水路に向かいます。子供たちは泥まみれになるのも平気で、ヘビ（ヒバカリ）も捕まえました。捕まえた生きものは、虫かごや水槽に入れます。30分の探索で、アマガエルやキリギリス、ドジョウな

どが集まりました。そしてどんな生きものがいたか、講師の谷川さんといっしょに図鑑から探し出しました。生きものたちを、もといった場所に放したあと、コンバインでの刈り取りも見せてもらいました。



参加者が捕まえたアマガエル

公民館にもどってお昼をとったあとは活動のふり返りをしました。生きもの調査では、水路ではドジョウとシマゲンゴロウの2種、田んぼではアマガエルやハシリグモなど13種、離れた所にいたモズなど鳥が5種、合わせて20種が見つかったこと。私たちがご飯として食べる稲の育つ場所が、これら多くの生きものの生活の場所であることを改めて考えてもらいました。

実際に田んぼで暮らす生きものと農作業を市民に知ってもらうことは、すごく大事なことです。全農の地道な取り組みにこれからも期待します。



刈った稲の前で記念写真

## <水田部会からのお知らせ>

### 田んぼ 2030 プロジェクト 第 11 回ミニフォーラム開催予定 「田んぼの O E C M / 自然共生サイトへの登録数を増やすために」

日時：2026年2月18日 18：30～20：10 オンライン開催 申し込み不要

Zoom情報：<https://us02web.zoom.us/j/84662474269?pwd=Tqw845TrIvIvYY8eflOIzcx5yCJ2.1>

ミーティング ID: 846 6247 4269 パスコード: 629952

ラムサール・ネットワーク日本の「田んぼの生物・文化多様性 2030プロジェクト」では、農業の現場の生物多様性を向上させることを目的に、さまざまな農法・調査・法律等をみなさんと学び、意見交換を行う場として、ミニフォーラムを開催してきました。食料生産の場であるとともに、適切な管理により多様な生きものが生息する湿地生態系として多くの生態系サービスを提供している水田は、「自然共生サイト」OECMとして最適であると考えられています。

第11回ミニフォーラムでは、ネイチャーポジティブ（自然再興）

の実現に向け地域での生物多様性に関する活動を促進するために2025年4月1日に施行された「地域生物多様性増進法」について、環境省 自然環境局 自然環境計画課 地域ネイチャーポジティブ推進室の吉田宗史さんから報告・説明をいただき、そのあと水田の現在のOECM登録地の具体例と、これから水田の登録地をさらに増やしていく方法について呉地正行さんから報告/提案をしていただきます。

さらに、各地でこのような動きを拡げていくために、参加者のみなさんと意見交換・議論を行います。

#### プログラム

#### ◎話題提供 18：30～19：30

##### 1. 「地域生物多様性増進法」について 30 分



吉田 宗史さん（環境省 自然環境局 自然環境計画課 地域ネイチャーポジティブ推進室）

環境省自然環境局自然環境計画課地域ネイチャーポジティブ推進室OECM係長  
2015年環境省入省。富士箱根伊豆国立公園、三陸復興国立公園、山陰海岸国立公園等の現地管理に従事。その他、福島震災復興、知床世界自然遺産地域の管理運営等も担当し2025年7月より現職。自然共生サイトの認定促進等によるネイチャーポジティブな地域づくりを推進している。

##### 2. 「水田の OECM 登録地の現状と登録地をさらに増やしていくために」 30 分



呉地 正行さん（ラムサール・ネットワーク理事/日本雁を保護する会）

1949 年神奈川県生まれ。東北大学理学部卒業。ガン類の保護、希少種の回復・復元とその生息地の保全、およびガン類と農業との共生に取り組む。市民参画型の自然再生運動や地域興しを实践。水田の湿地機能に注目し、生物多様性を活かした循環型農業をめざす「ふゆみずたんぼ」を広く紹介。蕪栗沼・周辺水田のラムサール条約湿地登録や、水田の湿地機能と生物多様性に注目したラムサール条約と生物多様性条約の「水田決議」採択にも関わってきた。大潟村応援大使、蕪栗ぬまこくら理事長なども努める。2022 年には、山階芳麿賞、ラムサール条約のラムサール賞ワイズユース部門を受賞。

#### ◎意見交換 19：30～20：00

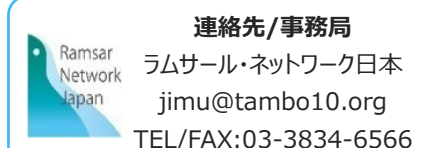
たくさんのご参加をお待ちいたします！なお、1月31日のネイチャーポジティブナショナルフォーラムへご参加下さった皆様、ありがとうございました。報告は第12号（3月発行予定）に掲載予定です。



#### 【編集後記】

庭にも外来種が来ていました。キマダラカメムシはどこかで越冬しているらしいです。昨年、ユーカリ（生け花に使えるので外来種だが植えておいたもの）の葉っぱの裏に、まあく並んでへばりついた幼虫を見たときは驚いてしまいました。パイオームに写真を送らなくてはと思いながら半年経ってしまいました。そしてアキニレの中にも明らかにムシ（カシナガ？）がいます。根元に大量の白い木くずが積もっていて、幹にはいくつもの穴が開いています。となりのシラカシたちがやられる前に、夏になる前に、何とかしないとイケないです。 ナマケモノモドキ

※田んぼだよりへのご意見、活動情報等をラムサール・ネットワーク日本事務局までお寄せください。



田んぼ 2030 プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。